

和漢薬の基礎研究から臨床応用への課題

東京大学医学部生体防御機能学講座助教授 丁 宗鐵

〔緒言〕 医療の目的は病める人々の苦痛を軽減し、疾病からの回復を目指すことにある。日本においてこのような実現的要望に長い間に渡って答えてきたのが和漢薬とそれを応用する漢方医学である。その科学的根拠と実際の臨床の間にはいまだ大きな溝が残っており、これを埋めるのが和漢薬シンポジウム以来の本学会の継続した課題である。

漢方エキス製剤が保険薬価に収載されることにより日本の現代医療の中で和漢薬も正式な医薬品としての立場が認められたかに見え、その基礎、臨床の研究も一頃より活発になってきた。しかしながら厚生省、文部省が積極的に研究、教育を鼓舞することはついになかったし、日本の医療の発展、進歩という観点から和漢薬が見直されることもなかった。むしろ最近では漢方薬が医療の質の問題ではなく、また医療経済学的な検証すら行われることなく健康保険の出費問題として矮小化され論議されるに至っている。このままでは和漢薬は西洋薬開発のための一素材となってしまう恐れすらある。

〔薬と疾病〕 まず我々の研究対象である「薬」「疾病」「健康」について根源的に問い直すことから始める必要がある。漢方医学と西洋医学の中では同じく薬といってもその意味する内容が異なっている。西洋では薬はそれ自体が完成品である。投与対象を増すことにより一定の薬理効果が保障されなければ薬でないとする。一方、漢方医薬では薬の効果は投与される生体の条件によって異なるとしている。つまりその使い方と一体になって始めて薬であり、薬自体はいわば半製品である。

同様に疾病を診る視点も異なる。漢方では中庸の状態が理想的な健康とし、中庸を保つことによりはじめて天寿を全うできると考える。また同じ病邪に対して個体間で反応に差があることはもちろん、同一個体ですら年齢、体調によって抵抗性も反応性も異なるとしている。そのため、治療は常に逐次修正の考えに基づいて微調整しながら行われなければならない。疾病は外邪や内因性の侵襲に対して生体が恒常性を保てなくなった中庸からの逸脱状態である。つまり、侵襲に対する適応不全が疾病状態である。短期的適応は細胞レベルのストレス蛋白の誘導や自律神経反射によって敏速に行われる。中期的適応は、漢方でいう気血水すなわち神経、免疫、内分泌系のCross talkが求められる。長期的適応には種の変化、すなわちDNAレベルでの変化が必要な場合もある。通常、生体の自然治癒機転を阻害せずに短～中期的適応を助ける活性のあるものを漢方医学では薬とする。このように和漢薬の作用機序は生体内の調節が主であり、高位の中枢や調節システム全体に作用するところに特徴がある。この研究には多くの場合、西洋医学の手法をそのまま応用しても回答を得ることはできない。また大学や研究室にのみとじ込めた研究だけでは

なく、さらに医学・薬学教育を巻き込んだ変革が求められている。

〔代替医療の潮流〕 天然物を直接治療に応用してきた医療文化をもつアジア諸国がその科学的検証を前に足踏みしている間に欧米諸国においては伝統医学に対して新しい流れが起こっている。漢方薬、民間薬、鍼、その他の代替医療、非正統医療と呼ばれていた領域への一歩踏み込んだ取り組みである。1993年ハーバード大やミネソタ大などのプライマリケアの部門にAlternative and Complementary Medicineという講座が開設されたのを契機にすでに全米125の医科大学のうち40校に同様の講座が開設された。これらの講座では基礎医学から臨床までの幅広い人材が集まり、臨床的有用性と安全性からその科学的根拠までをあらゆる角度から検討している。一度は大学から去りかけた生薬学の専門家も復活してきた。また、これら講座での成果はNIHの代替医療部門に情報が集められ整理され、更なる臨床応用や研究のための公開されるデータベースとなるとされている。このように官民一体となってより患者の満足度やQOLに立脚した新しい治療への可能性を組織的に追求している。

〔新たなる展開〕 西洋医学と疾病観も治療に求めるものも異なる医療に用いられるのが和漢薬である。健康を長い時系列の中でデザインしてゆくのが漢方医学であり、その文脈の中で和漢薬は応用されてきた。世界の潮流として西洋医学はその画一的大量生産方式から個別的少量多品種の姿勢に変わりつつある。新しく開発されてくる薬の分野では西洋薬の漢方化傾向が明かに認められるようになってきた。和漢薬研究は薬だけでなくその応用ソフトも含め研究対象とし、西洋医学の”漢方化”の前衛になるべきであろう。